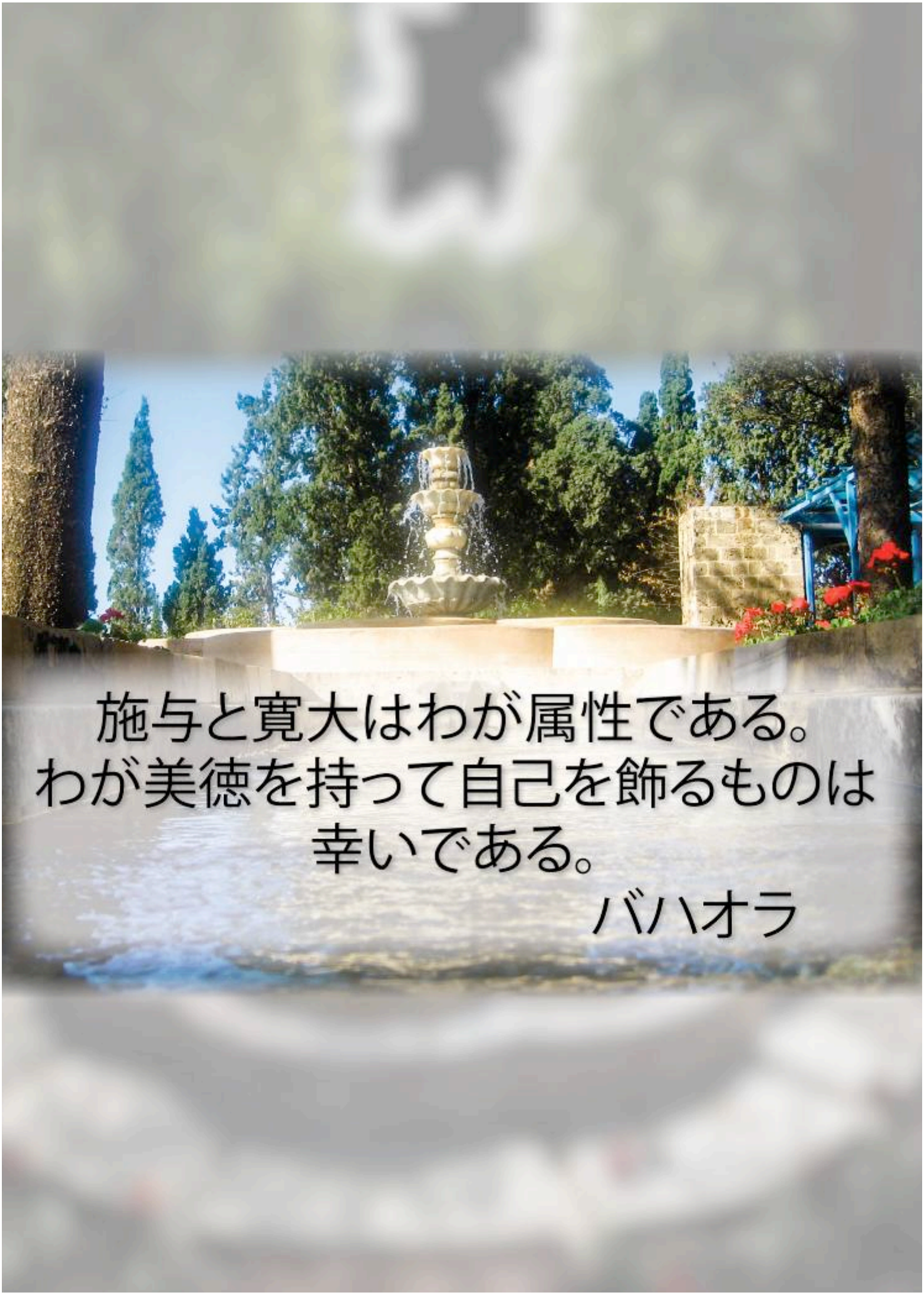
もくじ

バハオラの言葉(ことば)……2
寛大(かんだい)……3
クイズ……8
ぬり絵(え)……9
飾(かざ)りかご

ひるの星

No.　258

……10
みんなの写真……11
保護者のページ……12


施与と寛大はわが属性である。
わが美徳を持って自己を飾るものは
幸いである。
バハオラ

寛大

５人の幼い子達が両親と美しい沖縄の海岸で遊んでいました。お母さんは浜辺に座って一番幼いアニサが砂遊びをしているのを見ていました。お父さんは他の４人の子達とさざ波の中を泳いで遊んでいました。そんな穏やかなひととき、みんなの荷物の番をしているお母さんの所へリアズが走って戻って来るのが見えました。そのリアズの後をシャラが、「ダメよ！」と悲鳴をあげながら追いかけて来るのを見て、お母さんは驚きました。

「二つも持っているんだから、一つ借りてもいいじゃないか！」とリアズが大声で叫びました。

「ダメだと言っているのに！お母さん、止めて！」とシャラが叫びました。

「二人とも、どうしたの？」とお母さんが聞きました。

「私の水中メガネよ！だから、ダメだと言っているのに！」とシャラが地団だを踏みながら叫びました。

「お母さん！シャラは二つも持っているんだよ！おれのはこわれているんだ。シャラのを一つ借りたいだけなんだ！それくらい、いいじゃないか。」と、リアズがシャラとほとんど同時に言いました。

「まあ、まあ。二人とも落ち着いて、そこに座りなさい。話を聞きましょう。」と言いながら、お母さんが二人にバスタオルを手渡しました。

「さてと、二つのことを考えてみましょう。」とお母さんが始めました。

「二つとも私の水中メガネよ！」

「二つもあるじゃないか」と、シャラとリアズがそれぞれの言い分を同時に叫びました。

「その二つじゃなくてね。」と言って、お母さんがほほ笑んで続けました。

「一つはね，バハオラの言葉に、『*誰でも…飢えで死にそうであっても隣人が所有する物に手を伸ばして、不法にそれを奪うことを拒否すべきである…*」

「*…たとえ、どれほどその隣人が卑しい価値のない人間であっても。*』」と、海から上がって来て海水を垂らしているアスマが引用文を続けました。

「何だって！私が卑しくて価値がないとでも言うの！」とシャラが立ち上がってアスマに噛みつくように言いました。

「リアズ、この引用文の意味は分かる？」とお母さんが聞くと、

「勝手に人のものを取らないことだろ。」とリアズが渋々答えました。

「そうよ、人のものには触らないことね、どんな

理由があっても！」と言って、お母さんが続けました。
「二つ目はね、バハオラの言葉にね。。。『繁栄にあっては寛大であれ。。。」
アニサが続けて、「。。。逆境にあっても感謝せよ。』」と言いました。みんなは驚いてアニサの方を見て笑い出しました。
「その通りよ！」とお母さんが言いました。「この引用文の意味は、何でも余るほどあれば分け与えなさい。欲しいものがなくても、あるもので満足して感謝しなさいと言っているのよ。　アブドル・バハがいいお手本ね。アブドル・バハはいつも誰にでも知っている人にでも知らない人にでも同じように寛大にしていました。誰かアブドル・バハの寛大さの話を知っている？」

「私、知っているわ。アブドル・バハが幼い少年の頃、お父様の羊の様子を調べて来るように言われたときの話ならね。」とシャラが言いました。
「それなら、おれも知っているよ。」とリアズが言って。「羊飼いたちが、いつもは何かプレゼントをもらっているとアブドル・バハに言ったけど。アブドル・バハは何にも持っていなかったんだろ。」
シャラが続けて、「それで、お父様の羊を全部あげちゃったのよね！」
「それを聞いて、お父様のバハオラはアブドル・バハをちゃんと見ていないと、ついには自分自身をあげてしまうかも知れないとみんなに言いました。まさにその通りになって、アブドル・バハはその一生をみんなに捧げたんだ。」とリアズが締めくくりました。
「他に誰かアブドル・バハの寛大さの話を知っている人いる？」そのとき、ちょうどお父さんとモナが海から上がって来て、この話を聞いていました。みんなが揃ったところで、お母さんがサンドイッチとおにぎりを配りました。モナが答えて言いました。
「私、知っているわ。余っていたわけではないけど、アブドル・バハが気前よくあげてしまった話。アブドル・バハには普通の人だったら必要だと思うものまであげてしまった話があるのよ。アブドル・バハとその家族が夕食を取ろうとしたとき、誰かがやって来て、近所に食べる物がなくて困っている家庭があると言いました。アブドル・バハは御自分の家族に、その日の夕食はなくても次の日に食べる物はあるんだからと言って、夕食をその家庭に届けさせました。」

「わおー。」とリアズが言って、「自分の夕食を全部あげちゃうなんて考えられるかい？他の誰かのためにだよ。お腹が空いてくるのに。今、この浜に食べ物がない家族がいたら、おれたち腹減っているのに、その家族におれたちの食事を全部あげちゃうなんて考えられるかい？」
「アブドル・バハはアメリカでも同じようなことをされたのよね。」とシャラがみんなの話にのってきました。
「アブドル・バハはぼろぼろのズボンをはいた、み

すぼらしいホームレスの男の人を見て、茂みに入って行きました。そしてズボンを脱いで、長いコートに身体を隠して出て来られました。脱いだズボンをその男の人にあげました。」
「本当に、みんな、ズボンはあった方がいいもんね。」とアニサが真面目な顔をして言ったものだから、みんな笑ってしまいました。
「アブドル・バハはいつも出来るだけ安い方法で旅をされました。要らないものには、お金は使わないで、余分なお金は貧しい人たちにあげていました。そうだよね、お母さん？」と、いつもお金の使い方がうまいアスマが言いました。
「そうなのよ。他にもそんなお話が本当にたくさんあるのよ。毎日の生活がそんなだから。」それからお母さんはさらに付け加えました。
「アブドル・バハがこのようにお手本を示されているんだから、私たちも寛大になるようにがんばらなくちゃ。そして、いつも自分よりも他の人を大事にするようにしましょう。その人が知らない人でもね。」みんなの口が食べ物でいっぱいになって、静かになったところで、お父さんがここぞとばかり始めました。
「みんな知っているように、動物の世界は強いものが勝つ競争の世界だ。動物は『取る』だけ。そういう性質の生き物なんだ。動物は『取る』ことで生き残って子孫を残している。自分たちと違う生き物に何かを『与える』という考えはない。そうすることが必要だから、それが悪いというわけではないんだ。そういう風に神様が造られたんだ。反対に、神様は『与える』だけ。これは神様の属性で、これが神様だと分かるんだ。神様は目に見えるもの見えないもの全てに、必要とするものを『与える』御方なのだ。さて、それでは人間はどうかというと、身体は自然界の動物だが、神様を知る精神界の魂がある。したがって我々人間は動物のように『取る』ようにもなるし、神様を知ることて、『与える』ことも出来るんだよ。神様の言葉に『*施与（与えること）と寛大はわが属性である。わが美徳を持って自己を飾るものは幸いである。*』とあるように。アブドル・バハの毎日の生活に、そのお手本があるんだ。」子ども達はしばらく黙って考えていました。そのとき、

「そうよね。」とモナが言って、「私ね、アメリカインデアンの伝説で似たような話を聞いたことがあるのよ。それはね、私たちの心の中には二匹の狼が潜んでいて、一匹は『取る』だけの自己中心の狼で、もう一匹は寛大で『与える』ことが出来る狼なの。この二匹はいつもどちらが勝つかケンカしているというのよ。お祖父さんからこの話を聞いた幼いインデアンの男の子が、そのお祖父さんに、『どっちの狼が勝の？』と聞いたの。するとお祖父さんが、『そりゃ、もちろん餌を多く与えた狼

の方さ。』と答えたんだって。」
「だから、おれたちも自己中心の心を育てると、その方が強くなるし、寛大で与える心を育てれば、そちらが強くなるわけさ。」とアスマが力を込めて説明しました。
「それではシャラとリアズの問題に戻りましょう。」とお母さんが言いました。
「それがいい！」と二人とも口いっぱいの食べ物を吐き出しそうに叫びました。お母さんがそれを戒めるように二人を見て続けました。
「シャラ、どうして水中メガネを貸すのがいやなの？」
「私、洗濯物をたたむのを手伝ったり、お皿を洗ったりしてお小遣いをためて、新しい水中メガネを買ったのよ。それを未だ使ってもいないのよ。古いのがこわれたときのために、とっておいたのよ。リアズは大事にしないからダメなのよ！リアズのは私の古いのと同じ、お母さんが買ってくれたものよ。自分のはこわしてしまって、人のを使おうとするなんて！」
「リアズ、シャラの新しいのを使おうとするなんて、どういうつもりなの？」とお母さんが聞くと、
「シャラは新しいのは使っていないじゃないか。古いのより良さそうだから、使ってみたかっただけさ。」
「誰か他に意見ある？」とお母さんが、みんなを見まわして聞きました。
「バハオラは、何でも決めるときは協議することがとても大事だと言われました。」
「シャラはリアズに古いのを貸して、新しいのを使ったらどうだろう。」とアスマが提案しました、モナも賛成してうなずきました。
「私のを使っていいよ、リアズ！私、自分のはほとんど使っていないの。水の中に潜るの嫌いだから。」とアニサが言いました。
「いいこと言うじゃない、アニサ！アブドル・バハみたいに『与える』狼を育てているのね！」とモナが感心して言いました。シャラが頭をうなだれて静かに言いました。
「私もその『与える』狼を育てなくてはいけないようね。リアズに古いのを貸してあげる。どうせ新しいのを使ってみたかったんだから。」
「古いのでも貸してもらえるんだったら、うれしいなあ。でも本当は新しいのがどんなか、ちょっとの間だけでも使ってみたいんだけど。」とリアズがちょっぴり残念そうに言いました。
「そうね、新しいのも使ってみてもいいよ。アブドル・バハのようになって、新しいのをあげたらいいんだけど、私、未だそこまで行ってないわ。」とシャラがちょっと恥ずかしそうに言いました。お母さんが笑って言いました。
「少しずつ、毎日と、アブドル・バハが言われているように、いい人間になる努力をすることね。一度に聖人にはならなくても、少しずつ、日に日に、だんだん良くなるようにするのよ。」
「ところでアニサ。シャラ、リアズそれからモナ

とおれとで、水中メガネで泳ぐのを教えるというのはどうかな？そうすれば潜るのも怖くなくなるかも。」とアスマが言いました。アニサは手を叩いて喜びました。他の子達もみんな賛成してうなずきました。みんな立ち上がって、アニサの手をつないで話しかけながら、波打ち際に向かいました。お母さんが大声で注意を呼びかけました。
「波打ち際からあまり離れないようにするのよー！腰より深いところには行かないようにねー！みんな食べたばっかりなんだから気をつけなさいよー！」子ども達は笑いながら、手を振ってこたえました。お母さんが心配そうにお父さんを見ました。お父さんはお母さんに同感してさっと立ち上がって、子ども達の安全を確かめるため、その後を追いました。

私たちは噴水か泉 のようになるべきである。自分が持っているものを止めどなく空にしていっても、目に見えない源 から止めどなく満たされていく。欠乏の怖れで止めることなく、友にとって良きものを止めどなく与えていくこと。そして全ての富と良きものの源 である御方の尽きない恩恵にすがることこそ、正しい生き方の秘訣である。

ショーギ・エフェンディ

クイズ

１．このお話で、５人の幼い子達はどこで遊んでいましたか？

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

２．口ゲンカしていた子達は誰と誰ですか？

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

３．お母さんが言った一つ目のバハオラの言葉は何ですか？

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

４．お母さんが言った二つ目のバハオラの言葉は何ですか？

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

５．幼いアブドル・バハはお父様の羊飼いに何をしたのですか？

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

６．食べ物がない家庭があると聞いて、アブドル・バハは何をされましたか？

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

７．お父さんが説明した、動物と神様がすることとは何ですか？

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

８．動物がするのと神様がするのと、どちらを人間はするでしょうか？

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

９．アメリカインディアンの伝説はどんなのお話ですか？

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

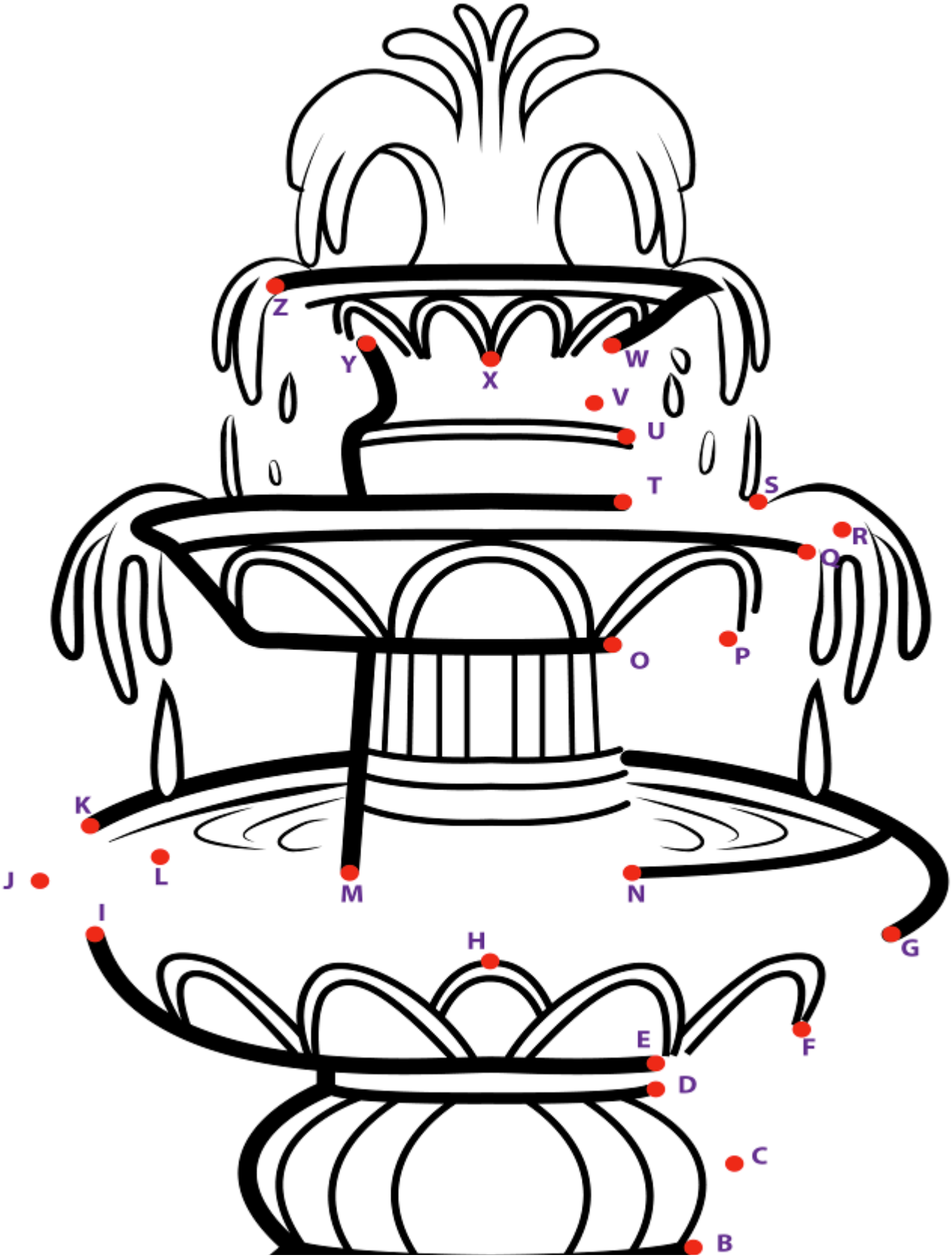
10.　あなたが育てるのはどちらの狼ですか？

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

どうでしたか？全部答えられましたか。答えは保護者のページのお話のあとにあります。

ぬり絵

アルファベット順に点をつなげて、絵が完成したら色塗りしましょう。



飾りかご

材料

＊水玉ふうせん
＊ししゅう糸（ピンクや水色など）
＊はさみ
＊木工ボンド（白）、
＊きらきらのり
＊ビニ帯、洗たくばさみ

作り方

＊水玉ふうせんをふくらませる。
＊ししゅう糸をふうせんに巻きつける長さに切る。
＊容器のボウルに木工ボンドを入れて少し水でうすめる。
＊ししゅう糸にボンドを浸みこませる。
＊ししゅう糸を網かごになるように、ふうせんに巻きつける。
＊ふうせんを洗たくばさみで吊るして、ボンドを乾かす。
＊ししゅう糸のボンドが乾いたら、その上にきらきらのりを塗る。
　ふうせんを割いて網かごの中に造花とかランプを入れて、ビニ帯で吊るす。飾りかごの出来上がり。

Photos

保護者のページ

私たちの５人の子が幼い頃、お誕生日やアヤミハなどのプレゼントに玩具をあげたとき、必ず子どもに次のように言い聞かせました。貰ったということは、もともと自分のではないから、その玩具はみんなが遊ぶためにあり、貰った子はその玩具を大事にする責任を貰っただけである。だから、他の子がその玩具で遊びたいとき、貰った子の許可がなければいけない。貰った子はその玩具が壊れないように大事に扱われているかどうか、ちゃんと片づけられているかどうか確かめる責任がある。つまり、全部の玩具はみんなが遊ぶためにあって、その一つ一つは貰った子に責任がある。こういう風にして、私たちの子に寛大になることを教えました。この世にあるものは全て、私たちがこの世にいる間だけ一時的に使えるように神様が造られたもので、私たちのものは一切ありません。

お話に出て来る引用文を次に書きだしました。お子様と一緒に読んで話し合ったり、暗記したりするのはどうでしょうか。

誰でも…飢えで死にそうあっても隣人の所有物に手を伸ばして、不法にそれを奪うことを拒否すべきである。たとえ、どれほどその隣人が卑しい価値のない人間であっても。
バハオラ

繁栄にあっては寛大であれ、逆境にあっても感謝せよ。 バハオラ

施与と寛大はわが属性である。わが美徳を持って自己を飾るものは幸いである。 バハオラ

私たちは噴水か泉のようになるべきである。自分が持っているものを止めどなく空にしていっても、目に見えない源から止めどなく満たされていく。欠乏の怖れで止めることなく、友にとって良きものを止めどなく与えていくこと。そして全ての富と良きものの源である御方の尽きない恩恵にすがることこそ、正しい生き方の秘訣である。

ショーギ・エフェンディ

クイズの答え

１）沖縄の美しい海岸、２）シャラとリアズ、３）*誰でも…飢えで死にそうであっても隣人が所有する物に手を伸ばして、不法にそれを奪うことを拒否すべきである。たとえ、どれほどその隣人が卑しい価値のない人間であっても。４）繁栄にあっては寛大であれ、逆境にあっても感謝せよ。５）*お父様の羊を全部あげた。６）家族の夕食をその家庭にあげた。７）動物は取る、神様は与える。８）どちらもする。９）心の中に取る狼と与える狼がいる話。１０）与える狼がいい。

Ｎｏ．258
2014 年 6 月発行
ひるの星をカラー印刷するには以下のリンクにアクセスしてください。
http://hirunohoshi.weebly.com/

日本バハイ全国精神行政会
〒160-0022 東京都新宿区新宿７丁目２番１３号
電話：03-3209-7521　ＦＡＸ：03-3204-0773

ひるの星委員会：グレン・ロウ、バウデンカービー真己、平原静志、平原ルアナ
物語：平原ルアナ
和訳：平原静志
ぬり絵：グレン・ロウ
写真：ウィキペディア、平原ルアナ、イヴァ・尊田、グレン・ロウ
さし:絵、平本かおり、スティーヴ・パスカル、グレン・ロウ
テクニカルアドバイザー：グレン・ロウ
監修：平野祐一

皆さんのお子様のバハイ活動で、みんなに役に立つ
いいお話とか写真などがあれば、
luanahirahara@hotmail.com に送ってください。